

資本論冒頭文節の体系的意味

梯 明 秀

一 脚註第一の論理の意味

二 河上博士による解説の批判

一、脚註第一の論理の意味

I

資本主義の生産様式の支配する社会、すなわち近世の市民社会が、自然史的に自己の全体的な実在的諸内容を自発自展せしめんとするにあたって、そこに素朴なる市民的生活をよぎなくされている大衆が自己の人間的生活をまもるために、資本主義的諸制約のうちにあつて、一切のこれらの特殊な諸制約を止揚した普遍的意識を自覚し、資本主義的に規定された政治的圧力に抗しながら、市民社会の実在的な全内容を本質的に把握しようとする学問的態度に、マルクスの『資本論』が成立したとわたしは見る。かかる普遍的意識は市民的生活における一切の特殊性を超えてこれらを内につゝむ具体的一般者であり、大衆が人間的生活を防衛するために自覚さるべき共通の広場である。この場所としての具体的一般者に受容さるべき対象的全質料は、その非合理性のうちに合理化

さるべき必然性を初めから孕んでいるごとき実在であり、感性的に直観された内容でありながら同時に思惟的にも不問にすごしえない課題としての所与である。すなわちカントが考えたような、悟性によって思惟する以前にたまたま外から受け容れるだけの所与ではないし、またヘーゲルが考えたように、ただ思惟の徹底によつてのみ自覚さるべきロゴスでもなく、この理性的内容が感性的に非合理的実在のうちに直観されるのである。いわば非合理即合理であり、所与性にして規定性であり、現象と本質との二者闘争的な性格をもつ実在である。かかる実在であればこそ、その自己矛盾によつて自己の全内容を時間的に、過程的に自発自展せしめるということもできる。いかえれば、主体的に自己の潜在的な全規定を展開する、いわば自己運動する物質的過程として、対象的実在の全体性を把握することもできる。だが、対象的実在をこのように過程的に把握しうるのは、場所としての、何処までも自己否定的に後退してゆく動的な普遍的意識を前提してのうえのことであつた。

すなわち自発自展する感性的実在というばあいの主体的契機は、場所的な具体的一般者であつて、これが原理となり、そしてこれを目的として、特殊的な諸内容を時間的に統一してゆく過程が、現実の歴史を構成しているのである。ヘーゲルは人間の歴史を自然において神の理性が自覚されていく過程として、具体的一般者を過去に完成されている絶対精神としたが、これは、具体的一般者の特殊化的な自己展開を、単に一面的に過程的なものと限定してしまつたことになる。すなわち神が主体であつて、人間が主体となることがなかつたからである。現実の人間の歴史は過程的であるに相違ないとしても、それが過程的であるのは理念が場所的に自覚されるからであり、したがつて単に連続的な過程でなく非連続を媒介にした過程であり、段階から段階へと飛躍しながら自己同一を喪わない過程で、人間の歴史があることが更に現実的な姿であることに異議のないはずであらう。実在す

る社会が自己運動をする物質的主体であるということも、大衆の場所的直観において歴史的理念が自覚されているかぎり¹⁾のことで、資本主義社会の實在的全内容が自己の潜在的本質を規定的に現実化していくことも、資本主義的に疎外された賃労働者の時局的一般者に向う自己否定的なレジスタンスが不可欠の前提として横はっているはずであろう。マルクスは、資本主義的生産様式が支配的に行われるこの市民社会を、その自己否定的な自発自展において把握することを学問の仕事としたかぎりて、認識論的にかかる場所的な具体的一般者の立場に立つていたとみななければならない。實在する対象的社会も、そのかぎりて単に認識主観に相対的な客体としてではなく主体として、自らの諸規定を總体的に自己展開する主体として初めから表象しえた²⁾のである。そしてこのことは同時にまた、対象的實在の要請のままにこれを絶対に受容するというような、そして要請を自己の意志としてこれが実現のために、非合理的な被制約性を悉く否定し拒斥し破壊していくというような、自己否定的な、しかも積極的な実践の立場に立つていたことをいみする。かくて、具体的一般者はヘーゲルにおける単に理論的な性格をすてて、意志実現の場所³⁾としてマルクスの実践理性によつて把握された資本主義社会の實在的内容が、マルクスの学問的生命であつたわけである。また、この實在的内容がマルクスの学問的意識のうち論理的に順を追つて全体的に自己展開をとげるといふ体系性⁴⁾に、体系化さるべきマルクス主義が成立する。そしてマルクス自身によつてこの体系化が実現されたものが、『資本論』全三巻の体系的叙述である。

1、戦前からわたしが実践的直観、自己否定的直観、あるいは歴史的直観と呼んできたところのものであるが、戦後は場所的契機の展開を意図して、この立場の論理構造はやゝ具体化することができている。拙著『資本論の学問的構造』所収の「哲学と社会科学」、および本誌前号「序説」を見よ。ところで、マルクスもこの実践的直観の立場でのみ『資本論』を書きえたのであり、したがって「冒頭文節」もこの立場によつてのみ、独断的命題でも単なる仮説でもなく、体系的な始

元として必然的な命題であること、あるいはまた、その文章自体も何ら二義性をもたない、何らの矛盾をはらまないものであることを論証せんとするのが本稿の目的である。

2、マルクス『経済学批判』「序説」（字高訳）三四九頁。

3、拙著『資本論の弁証法的根拠』所収の第二篇「生産世界の判断過程」第一節、および「補説その二、歴史的自然」参照。

4、体系性ということの過程的意味の重要性については、本誌前号の所論を参照。

しかしながら『資本論』のしめす学的体系性は、その理念とする具体的一般者の論理構造をヘーゲルのそれとは対蹠的に異にしているがゆえに、『精神現象学』を前提とした『論理学』のしめす学的体系性とも、必然的にその構造を質的に相違せしめていなければならない。すなわち先ず、ヘーゲルの『精神現象学』は、資本主義社会の全実在的内容の人間意識への自己展開として、そして、これが同時に、市民の日常的な直接的意識形態から資本主義社会を全面的に、変革せんとする客観的な世界観までえのプロレタリアートの体験の遍歴として、マルクスにおいて「物質現象学」に転化される。次に、資本という経済学的カテゴリーの円環的自己運動として叙述された概念的方法として、ヘーゲル『論理学』の概念の自己運動が継承されるが、しかしこのばあい、ヘーゲルの概念が、人間の一切の有限的な主観的な意識諸形態を止揚した純粹知識であり、したがって逆に実在的な全内容がそこに同時に止揚されているような精神的な主体であるにたいして、マルクスの資本の概念的自己運動の論理は、物質的実在の自己運動の頭脳における再構成として何処までも観念的所産である。いかえれば、ヘーゲルが精神的実体において実在と観念とを同一化していたのにたいして、これらを劃然と分離し、精神を物質的実体の所産としていた唯物論が、『資本論』にヘーゲル『論理学』を継承するときの場所的意識になっていた。かくて『資本論』においては、プロレタリアートに直接的な世界観を主体的に自己展開する概念的方法としての「論

「哲学」がその叙述の内容となり、この自己發展の具体的現實性においては、實在的な資本主義的社會の經濟学的分析が媒介的に止揚されており、この科学的分析の成果を世界觀の内容として統一していく主体的反省としては哲学になっている。かかるいみで科学を媒介にした哲学という学問的構造において、『資本論』全三卷の体系は成り立っているのである。そして、世界觀を根柢にまで掘り下げる哲学のうちに、内在化されている外的反省としての科学的契機こそは、ヘーゲルの『精神現象学』の転化としての「物質現象学」が、『資本論』の叙述面に現れたその現實的な姿であるとせねばならない。このようないみで、百科全書的諸内容を哲学のうちに解消せしめてしまったヘーゲル哲学の学的体系性とは、まったく質的にその構造を異にするところの、すなわち科学と哲学との矛盾的統一として科学的形態をもった哲学としての、經濟学の姿のままに哲学たるを喪わない学問としての、体系性を『資本論』は實現しているのである。

このように『資本論』は、ヘーゲル哲学と異質的な構造にあるにしても、しかしながら、その体系性をもって学問的生命のとるべき現實的な形態とする点で、マルクスは『資本論』においてこそ、ヘーゲルからドイツ古典哲学の伝統的精神を正統的に継承しているといわねばならない。古典哲学に一贯した学問的生命はヘーゲル哲学において体系化され、そして、ヘーゲル哲学の全体系においては『論理学』がもつとも勝れて体系的である。この体系的的精神をプロレタリアートの世界觀の叙述のうちに生かしたのが、マルクスの『資本論』であろう。この『資本論』のヘーゲル哲学への関連を以上のごとく理解してきて、その第一卷第一部第一章第一節の冒頭に掲げられた簡潔にして極めて短い一文節にわれわれが接するとき、それは、單純に『資本論』の叙述を始めるために便宜的におかれたもの、くわしくいえば、単に第一節の、あるいは第一章の、あるいは第一篇の全叙述を、

導きだすための偶然的な緒口として書かれただけのものでは決してありえないことを、われわれは自覚させられるはずであろう。そして、そこには『資本論』全三巻を貫く体系的精神が宣揚されており、全三巻の叙述を論現的に次から次へと展開していくための統一的原理が秘んでいるのでないかと気づかされるはずである。そしてさらに、あたかも、ヘーゲルがその『大論理学』において、その第一巻「有論」の冒頭においたところの、「何が学の始元となされねばならぬか」という標題で展開された、始元についての長い大論述に対応し、かつそれに匹敵した体系的意義を担わされているのでないかと一度は考えてみなければならぬはずの一文節でなからうか。ヘーゲル『大論理学』のこの冒頭の長文の論述にくらべて『資本論』冒頭の一文節は、あまりにも思い切りよく簡単な短い句でもって打ちきられてはいるにしても、ここに、『資本論』が現実的な学体系的意義を發揮するため一般的な原理としての個々の商品から分析が始められねばならぬということが、主張せられてあるかぎりでは、全三巻によってなる一つの偉大な全体系における地位、全叙述にたいする支配力は、ヘーゲルにおけるかの冒頭の始元論が『大論理学』のみならず、延いては全哲学体系の叙述にたいする体系的意義と支配力とに匹敵して、決定的なものであるとされねばならない。しかも『資本論』のばあいには、それをして単に経済学におわらしめず同時に一つの特異なる哲学体系として人類の哲学史上において新たな位置を確保せしめるための学問性を、マルクスがそこに宣揚したはずのものとするべき重要性をもつ論述である。

5、『資本論』が現実的な学問であることについては拙著『資本論の学問的構造』所収の「現実的な学としての資本論」を参照。今のばあいは、ヘーゲルの『論理学』が純粹思惟をエレメントとする学体系的であるにたいして、思惟と感覚との矛盾的自己同一における学的体系であることに注意しておきたく、同じく現実的といっても、ヘーゲルよりはマルクスが、右の論理によって徹底させられているわけである。思惟と感覚との内面的統一については『資本論の弁証法的根拠』所収

「生産世界の判断過程」および「補説その一、感覚の客観性」を参照。

II

では、『資本論』冒頭のこの短い簡潔な文節が、かかる体系的意味をもつていると如何にして言いうるか。この意味を理解するために、先ず、この短い文章を吟味することから始めよう。すなわち次のごとくである。

——「資本制的生産様式が支配的に行われる諸社会の富は、一つの〆^レ老大な諸商品の集積^レとして、個々の商品は、その要素的形態として現われる。だから、我々の研究は、商品の分析をもって始まる。」——

右の脚註(1)によれば、マルクス自身の『経済学批判』への参照が読者に要請されており、そこで「老大な諸商品の集積」という言葉が、マルクスによって始めて創られ、しかも『経済学批判』においてマルクス自身も始めて使用したことが理解されるようになってゐる。しかし同時に直ぐ気づかれることであるが、この言葉の使用されてる個所の文章が、両著とも両著述の冒頭に置かれ、しかも同一の意味のものであることである。このことは、右の言葉の最初の出典の指摘であることに相違ないけれども、それと同時に、『資本論』第一巻の冒頭文節のもつ体系的意味そのものの出典の指摘、すなわち、マルクス自身の体系的精神の最初の発露が何時何処でなされてあつたかの指摘であることを、同時に意味しているのだからとわたくしが連想するとき、これは不自然なことであるだろうか。上述来わたしが強調してきたとおり、マルクスの理論的生涯は自ら把握した学問的生命を体系化せざるをえない必然性にあつた。その実現の第一歩が一八五九年の『経済学批判』であり、その第二歩が一八六七年の『資本論』初版であり、そして一八七三年のその再版において、第一巻の体系化を完成したわけである。そして、その表現において僅かながらの差異をしめすとはいへ、その文意においては全く同一の文章を、

しかも冒頭におくべきものとして、マルクスがその体系的位置づけを一貫して決めていたことを推定するならば、『資本論』から『批判』への参照を要求している右の脚註は、単に「老大な諸商品の集積」という一語の最初の使用というようなことよりも、冒頭文節全体に読者に参照せしめ、この文節全体のもつ方法的意味に読者の注意を喚起せしめるためのものであった、と見る方が論理的であろう。脚註番号の位置からのみ見れば明らかに不自然であるが、わたしのこの論理的な見方は、たとえ副次的な意味しかないとするも、無視できない重要性をもつものと信じたのであるが、どうであろうか。

6、河上博士著『資本論入門』（青木文庫版）、六四―六七頁。ここにおいて、博士は原典の ungeheure Warensammlung の文義的解釈に力をいれておられるが、これは論理的には何らの重要性をもつものではない。しかしこれは、『資本論』解説のために博士が、資料の検出に労を惜まねず意味理解のため細心であった態度の、一つの現れとして敬意をもたされる。

事実、この簡潔な冒頭文節には、近代市民社会全体を止揚せんがためのマルクスの階級的立場がすでに秘んであり、資本主義的経済体制を分析するための客観的な方法がすでに始まつており、ブルジョア経済学を批判するための根本的原理が、単純な命題ながら克明に宣言されているのである。そのかぎり、この冒頭文節は、マルクスが経済学の研究を始めてから『経済学批判』にいたるまでの研究過程の最後において到達した成果であり、自信を確実にしえた結論であると思わねばならない。労苦の成果であればあるほど、現在の自己の確信のほどを讀者のまえに誇示するということは、著者としては誰しも否定できない心理であるが、しかし、マルクスがかかると主観的な意図で右の文節を冒頭に掲げたと、わたしは言うのでは勿論ない。また、資本主義社会およびブルジョア経済学を分析し批判し研究した成果としての結論的原理であるがゆえに、マルクスがただそれだけの理由で、

この文節を冒頭においたとすることも、いまだ非理論的なものとして肯きがたい。なぜなら、ただ原理なるがゆえというだけの意図ならば、かならずしも冒頭におかなくても、それを提唱する個所は一冊の著書の何処にてもあるはずである。のみならず、結論的原理を卒然として冒頭に掲げることが、それが研究過程において必然的に到達すべき目標であつたと反省されたものか、あるいは一步すすめてこのことが論証済みであるか、いずれにしても著者自身にとっては極めて自然なことであつても、第三者には、すなわち読者にとつては、そこに論証が展開されていないかぎり独断的提言としか受けとれないばあひもあるわけで、かかる偶然的な意図は著者にとって不利であるはずである。『資本論』のばあひも、根本的原理を提唱するにあたり、冒頭文節としての突如これを敢行したというわけであるが、しかし第二文節以下の全叙述は、一步一步この原理の論証であり、原理からの論理的な推論過程であり、最初の抽象性の漸次的な具体化の進展であるという仕組になっている。すなわち、かかる叙述をその全過程を貫いて最初の原理が支配している。最初の原理を論証していくマルクスの叙述の過程は、最後に具体化される絶対的真理そのものの主体的な自己闡明の過程と同一である。到着点としての目的が出発点において原理としてあらわれているのである。そして、この思惟の自己目的々な円環運動こそが、一般に学問を必然的に体系的なものたらしむるのである。かくて、すなわちマルクスは、原理が始元であるほかなく始元は原理でなければならぬという学問の体系性を心得ていたが故に、原理を『資本論』叙述の冒頭に掲げたと、われわれは理解しなければならぬ。否、マルクスはこのことを単に心得ていただけでない。むしろ積極的にこのことを強調する必要があつたので、であればこそ、その叙述面にまで体系性を見せるといふ企てを立てたとせねばならない。というのは、逆にいえば、このことを心得てさえいけば、一般には著作の叙述は必ずしも体系化されね

ばならぬという理由はないからである。この必要とは何であつたか。ヘーゲル哲学を完全に止揚するために、かの偉大なる哲学体系に匹敵するほどのものを、マルクス自らも対抗的に構築しなければならなかつたのである。自分の哲学は科学を媒介にせんとする点で、ヘーゲル哲学に対立する。だが、単に対立するだけの特殊性の發揮でなく、ヘーゲルを完全に克服するためには、ヘーゲルの学的体系性を逆に特殊的なものとしてしまふほどの更に一般化した立場にたたなければならぬ。資本主義社会そのものを批判するために始めた自らの特殊な経済学的研究において、経済学でありながら、しかも絶対の真理を宿すべき学的体系を、ヘーゲル体系を特殊的なものとして止揚しうる普遍的なものとして樹立しなければならなかつた。この必然性が『資本論』を、その叙述面にまで体系的なものとして、マルクスに書かしたのである。そして、このかぎりで、またマルクスをしてヘーゲルの体系的精神の誠実なる継承者たらしめることになつたといふことができる。

7、これらのことについては、後に節を追って論述してゆく予定である。

8、学的体系性の内容的構造としてのこの円環運動については、本節にも次に一部分引用するが、『大論理学』「冒頭論述」の重要な内容であり、ヘーゲルの全哲学体系を貫くものであることは言うまでもない。したがってヘーゲルの著作のいたるところで、これについての直接的な論述に遡うが、試みに『大論理学』（邦訳、岩波版）八一―八六頁を参照。

さて、原理が始元でなければならぬということは、ヘーゲル哲学を一貫した体系的精神であつた。そして、ヘーゲルによるこのことの強調とその解明とが、『大論理学』第一巻冒頭の「学は何をその始元となすべきか」という標題の論述内容になつてゐる。ところでヘーゲルはこの「冒頭論述」において、「哲学においては、その始元を見いだすのが困難であるという意識は、近世にいたつて始めて痛感されるようになってきた」と書き出して次のごとく述べてゐる。

——「或る哲学がその原理とするところのものは、おそらく亦一個の始元であることを示すものであろうが、しかし原理は客観的な始元、すなわち凡ゆる事物の始元を表示するもので、主観的始元を表示するものではない。そして何らかの点で規定的な内容である。あるいは、原理が進んで認識の本性に関係し、かくて客観的規定以上の規準となるようなばあいにも、たとえば思惟、直観、感覺、自我、主観性そのものなどであって、こころもその関心の対象は内容規定にある。これに反して、始めること自身は、単に叙述を開始するための偶発的な仕方といういみでの主観的なものとして顧られず、また無関心にすごされ、したがって、何をもって始むべきかの問題の必要性は、原理の必要に比すれば殆ど無意義なものとして停まっている。ただ、原理の中のみ問題の関心、すなわち、真なる存在は何か、事物の絶対的根拠は何か、などの関心とされる事柄が含まれていると思われているのである。

しかし近代における始元に関する困惑は、一層広汎な要求から出發している。そして、この要求は、独断的に原理の証明を行う人々、あるいは懐異的に、独断的思考に反対して主観的規準の發見を目的とする人々の、まったく知らぬところであり、また、直接的に自己の内的啓示、信仰、知的直観などから出發して、方法あるいは論理を無視せんとする人々によって否認されてきたところである。未熟の抽象的思惟は、その始め単に内容としての原理に興味をもつが、教養の進歩とともに他の方面、すなわち認識の態度に注意をはらうようになる。かくて、主観的行為も客観的真理の本質的契機として考えられ、方法は内容と、形式は原理と一致しなければならぬという必要が感ぜられるにいたる。ゆえに、原理は同時にまた始原であり、思惟にとって優位のもの、また思惟の歩みにおいても最初のものとならなければならぬ⁹⁾。——

ヘーゲルのこの言葉の精神をマルクスは継承していたかぎりて、『資本論』の叙述の始めにおいて、原理を自覚的に、すなわち方法的にしたがって論理的に、始元としていたはずである。資本主義社会の経済学的分析による結論的な客観的規定をば、自らの高い哲学的教養の自負において、自己の世界観の主体的表現の始元とすることを敢えて自覚的に遂行したのである。であればこそ同時に、ヘーゲルの同じ「冒頭論述」における次の論理学的な方法を、経済学の領域においてマルクスは実現して見せることができたといふべきであらう。

——「哲学においては、前進はむしろ却って後退、あるいは基礎づけとなるものであって、この基礎づけを経ることによって、先に出発点とされたものが単なる任意的存存ではなく、むしろ実際には真理、あるいは最初の真理であるということが、明かにされる。……ゆえに、学問にとって根本的な事柄は、純粹直接的存在がその始元を構成するということよりも、むしろ学全体が自己に戻る円環運動を形成し、この運動においては、最初のものは最後のものであり、最後のものは最初になるという事実である。」¹⁰⁾——

すなわち、学問が体系的なかかる円環的自己運動性にあるかぎりて、始元の問題も必然的に体系的な意味をもつてくるというのである。『資本論』が前述したとおり、まさしくかかる円環的自己運動を実現した学的体系性にあつたかぎりでは、またマルクス自身もヘーゲルに劣ることなく始元の問題に関心していたと、われわれは思わねばならない。

9、ヘーゲル『大論理学』第一卷、七五—七六頁。

10、同右、八二頁、および八三頁。

以上が『資本論』「脚註(1)」について附隨的に連想さるべき論理学的意味である。しかしながらマルクスは、ヘーゲルの「冒頭論述」の標題にならって、「学としての資本論は何をもってその始元とすべきであるか」についての解明を長々と論述することはしなかった。そして、これを飛躍して、直ちに自己の研究の結論的原理を叙述の冒頭に短的に始元として掲げることによって、学的体系性ということの実質的な事柄を叙述構成そのままに直接的に表現したのである。なぜならば、『資本論』はその現実形態としては何処までも経済学であつて、たとへば体系的に叙述されていても、何故に体系化すべきかの哲学的解説は避けねばならなかつたからである。そして、このように叙述構成そのものが、その学的体系性をただ直接的に語っているという仕組にあればこそ、『資本論』の哲学的内容をわれわれが把握せんとするときには、その叙述の背後に隠された思惟の必然性を叙述の分析を通じて媒介的にしか辿つていくほかないことになる。このことは、したがつて、冒頭文節においても同じであること言うまでもない。かくて、冒頭文節の体系的な意味内容を、その根底から理解するためにも、それを構成する個々の命題に分離し、それらの一つ一つについて、その意味するところを分析していくよりほかに拠るべき方法はない。ところで、このばあいにも当然ながら、上述のごとく推定された「脚註(1)」の論理的意味が指導理念として役立ち、『批判』における「冒頭文節」と『資本論』におけるそれとの比較が要請されてくるのである。なお序でに『資本論』「初版」を参照してみても、「冒頭文節」は「初版」「再版」とも全く同文であることが確められる。『批判』におけるそれは次のとおりである。

——「一見したところ、ブルジョアの富は一つの老大な諸商品の集積として、個々の商品はその要素的な定有として現れる。しかしながら各々の商品は使用価値および交換価値という二重の視点のもとに自らを表示す

る。」——

さて、両著の冒頭パラグラフは何れも三段の文章からなっている。すなわち『資本論』のそれを基とし『批判』のそれで補足しながら、分析すれば次のごとく四段になる。

第一段、——「資本制的生産様式が支配的に行われる諸社会の富は、一つの尨大な諸商品の集積として現われる。」——

第二段、——「個々の商品は、かかる富の要素的形態として現われる。」——

第三段、——「だから、我々の研究は、商品の分析をもつて始まる。」——

第四段、——「（しかしながら）、各々の商品は、使用価値および交換価値という二重の視点のもとに自らを表示する。」——

ところで『経済学批判』の方の第三段は、第二文節以下において叙述されるところの、そして『資本論』においても第二文節以下の全内容え入るための展望的序言とみらるべきものであって、すでに商品分析の第一歩の成果が前提されている。すなわち第二文節以下において、先ず使用価値の視点から、次いで交換価値の視点から商品を分析してあり、したがって『経済学批判』、ならびに『資本論』においては、商品のかかる分析から始まって、その研究的叙述が展開されているのである。ところで何故に叙述を商品の研究から始めるかの理由は、マルクスとしては、第二段の一句、「一見したところ個々の商品は要素的定有として現われる」の意味から当然ながら容易に推察されうべきものとして、直ちに右の展望的序言に移ったのであろう。しかし、その理由の明示を欠くことは、論理的な運びとしては飛躍である。かくてマルクスも『資本論』初版の執筆にあたって

は、改めて第三段の文章を追加したと考えられないか。第三段は、したがって、『資本論』叙述の端緒が商品の分析であるべきだという論理的展開であり、その論理的根拠が「個々の商品がブルジョアの富の要素的定有である」という事柄そのものであることを主張したものである。とすれば、それは、すなわち方法的意識のもとにおける変更であつて、マルクスが「初版」執筆のための準備中に、ヘーゲルの『大論理学』の「学は何をもって始めるべきか」の始元論を、常に念頭において指導原理としていたことを、ものがたつてしているとわれわれは悟るべきであろう。しかも要素的定有 *Dasein* というヘーゲル『論理学』における抽象的段階における範疇の使用を廃めて、要素的形態 *Form* というその現実化された範疇で置きかえていることは、『批判』から「初版」までの期間に、ヘーゲル哲学体系の唯物論的改造への見透しを成就し、「再版」にいたつて現実的な学としての体系の構築に成功したことを推察せしめえないか。ところで、哲学体系、したがつてそのエレメントとしての範疇をば、現実化せんとする学問的意識は、同時に現実的な日常語の厳密化、論理化という逆の意識と相表裏しないでは半問性を逸脱する。そこで、第一段における「ブルジョアの富」が「資本制的生産様式が支配的に行われる諸社会の富」というように科学的にその規定性が厳密にされ、「一見したところ」という通俗的用語が省略されることによつて文意の論理的把握を要請することができているのである。以上のような冒頭文節についてのわたしの分析においてさえ、『批判』から『資本論』までにマルクスの体系的精神の自覚の伸展と成熟とがあったことがみられ、その「再版」においては、その旺盛した体系的精神の形成と彫琢とが第一巻全体にみられるのである。しかも、同一文章でありながら、「再版」における全叙述の体系的完成によつて逆にその方法的な原理としての支配力を実現したことになり、さらに「初版」いたつては単にマルクスの方法論的意識のただ溢しただけ

の姿とは、格段に面目を新たにして躍如たるものがある。いわば、第三段の追加によって冒頭文節の簡潔な叙述全体が、単に悟性的に推論形式を整えたというだけでなく、唯物論的始元論の展開としての姿を鮮明に表示したことになるという点で、いよいよ論理化されて全体系的叙述にたいする支配的地位を確立するにいたり、したがって、同時に『資本論』の学問的価値を決定的に高めていることになっているともいえるのである。

『批判』の第三段の文章は、その第二文節以下の商品の研究の展望的序言にすぎないものとしては、むしろ文節を改めて書かるべきであつたとすべきであろう。しかし、『批判』の冒頭文節を構成する二句のうち、前句の冒頭に「一見したところ……」となつてゐるかぎり、後句において「しかしながら……」と受けた文章構成にならざるをえずして、第二文節以下の研究的叙述への連絡上、冒頭文節の内容として残す必要があつたと推察されよう。マルクスも「初版」以来はこれを省略してあるが、冒頭文節から第二文節へ移行のための叙述方法としては論理的に無意味でなく、本稿における当面の分析的吟味の一素材として、これを第四段に残して置きたい。

二、河上博士による解説の批判

I

冒頭文節の研究としては、恐らくわが国に二、三の、文献をしかみないといえるであろう。そのうちでも、河上博士の『資本論入門』におけるその解説は、それが綿密周到なる点で唯一のものである。したがって本稿において、わたしが冒頭文節の個々の命題を通じてその体系的意味を探りださんとするにあたって、博士の研究を批判的に媒介することは、便宜であるというだけでなく正当な手続きと見られねばならない。のみならず、この

解説的研究には無自覚的ながら『資本論』にたいする体系的把握の萌芽を秘めている。すなわち、それは博士の哲學的意識の所産である。そのかぎりでは、本稿において主としてこれを取りあげること、方法論的に必然であると言わねば、と信ずる。

1、冒頭文節を体系的に理解するように問題にした人に、別に山田盛太郎教授がある。未発表の教授の「經濟原論」講義ノートによれば、第一篇、基礎概念、第一章、商品形態、第一節、商品分析の序説における「問題提示」として述べられてある内容は、この冒頭文節のみを取上げたものである。その書き出しは次のごとくである。「理論經濟学の領域においては、*ミス Adam Smith (1776)* によつて代表される古典經濟学の体系と、*マルクス Karl Marx (1867—94)* を基調とする批判的經濟学の体系と、*メンガー Carl Menger (1871)* を起点とする主観学派、近代經濟学を総体として見た体系とが三大体系を構成し、その三大体系の基本的特徴は、それ／＼右の三人の主著劈頭の一句の裡に要約されているものと見ることが出来る」と。そして『資本論』の冒頭文節を掲げたのち、「以上の一の尠大な商品集成を把握する把握の仕方を示すところのマルクスの高名なるこの劈頭の一句は、一方*ミス*のばあいのそれが「総労働生産物」の把握を示すのと正に照応し、その継承と發展とを悟り、他方、*メンガー*のばあいのそれが、「効用」「財貨」における因果律の把握を示すとは、系統の差異あることを物語る」と述べている。因みに、*ミス*『國富論』の開巻冒頭の一句は、「すべての國民の年々の労働は、本来その國民が年々消費するところのあらゆる生活の必需品と便宜品とを供給する資源 fund であつて、その必需品と便宜品とは、この労働の直接の生産物であるか、あるいは、その生産物をもつて他國民から購入したのである」。すなわち、教授は三大体系を比較しながらマルクス主義体系を検討せんとされるのであるが、これは、『資本論』冒頭文節をも体系的に問題にするための一つの展望を与えているとせねばならぬが、ただそれだけのものとして、わたしの本稿の目的のために直ちに媒介の資料となり難い。

次に、*樺田民藏全集*、第二卷、「価値および貨幣」、前篇、第五章は「資本論劈頭の文句とマルクスの価値法則」の標題であり、三〇頁程度で「冒頭文節」をまともに分析した見逃しえない文献である。その分析内容については本稿において資本論冒頭文節の体系的意味

ても後節の批判の対象として取りあげるはずであるが、しかし、この文献は冒頭文節そのものの体系的関点からの研究ではない。かくて、「文節」そのものの分析を通じてその体系的意味を採らんとするばあい、媒介的役割をもつものは、河上博士の解説が研究だけしかないということになるのである。

『資本論』を研究する経済学者、しかも特にその方法論に関心せる経済学者が、この「冒頭文節」についての研究的労作を、右の河上、山田、樺田の三氏の他に、恐らくは発表していない、とするわたしの推定にたいして、読者は不思議におもわれるであらう。しかし、この不思議なことに、わたし自身が一種の驚異を感じているのである。もちろん間接的に係わっている労作はある。すなわち「資本論の端緒をなしている商品が歴史上いつ頃に実在した商品と照応するか」ということは、周知のごとく、戦前から既に多くの人々によって論争されてはきた。この論争に参加した以上は必然的に「冒頭文節」に係わらないわけにいかないはずにもかかわらず、これらの人々は、論争の解決におそらく不徹底であったのであろうかぎり、で、「冒頭文節」の論理的意味を分析するところまで進んでいない。これは一つの不思議である。

右の論争については、宮川実氏『資本論研究』第一号の第二節「資本論はなぜ商品から始まっているか——端緒の問題」の最後の註において、要約的に整理され一応の俯瞰ができるのではないかと信ぜられる。これを一読して前述の不思議さに一つの驚異を感じたわけであるが、しかしこれによって、論争の内容は要するに次の点であることが確かめられる。それを要約すれば、いわゆる端緒的商品は現在のものであるか過去のものであるか、あるいは、資本の結果としての商品であるか原因としての商品であるか、さらに論理的に表現すれば、直接的なものであるか媒介的なものであるか、その何れであるかの対立に論争が展開せられている、とわたしは見る。したがって、これが解決のためには、両者の何れにも固執することを許されず、その対立における統一が考えられねばならないにかかわらず、この解決への努力は殆ど見られていない。そこで、右の対立において前者の立場をとる人は、第一章の第一、二節の角度から商品を見ており、後者の立場をとる人は、第三節「価値形態」の叙述の歴史的な面を論拠とする。そして、それぞれの視角において「冒頭文節」の「エレメントとしての商品」を漠然と眺めているのである。以上が宮川氏の要約を基にしたわたしの要約的感想である。

しかしながら私見によれば、「冒頭文節」における商品は、右の対立における何れでもなく何れでもある。すなわち対

立を統一した二重性のものである。そして、その一面の契機が先ず第一、二節で取り上げられ、その他の面の契機が第三節において問題にされるのである。これがマルクスによる第一章を叙述するさいの方法論であった。したがって、わが国における右の論争の解決も、「冒頭文節」における「エレメントとしての商品」が如何にして右の対立的二契機を統一しているか、を見ることよつてのみ期待せらるるとせねばならない。しかるに、この論理的分析を試みた人は、或は皆無でなかつたかとわたしは見ている。たとえ、これは、資料の検出が未だわたしに出来ていなのに基く誤つた見透しであるかも知れないにしても、この見透しが、本稿を執筆する動機の一つとなつてゐることだけは事實である。「端緒的商品」といつても、その本来の意味は、それが資本のエレメントであるかぎりのものとすれば、第一、二節なり、あるいは第三節なりの、何れかのみによつて問題にさるべきでなく、両者の統一としての「冒頭文節」に限定された商品の中に、正当に位置づけられねばならない。この点について本稿は最後の節で説明するであらう。また、これが論争自体の解決を意味するかぎり、論争参加者の諸説を必然的に批判することになるほかないであらう。

次に、哲学者の側から『資本論』を研究した業績においては何うであらうか。代表的なものとして、三枝博音氏の『資本論の弁証法』（時潮社刊）と武市健人氏の『ヘーゲル論理学の世界』（福村書店刊）上巻が挙げられる。前者の五頁に次の言葉が発見する。——「資本論のヘーゲル論理学との緊密の連関は、経済学批判の（経済学の方法）中には叙述されていない。それは吾々が資本論の中に発見せねばならないところのものである。……ただ留意すべきは、マルクスは資本論の構造について、一つ一つ方法的に説述する暇をもつていない。したがって、これは吾々が見出さねばならないものである。」——この書の初版が一九三一年のものであり卓見である。そして、わたしの研究生活は期せずして、この言葉の教示するところをわたしの立場から執拗に追求してきたものと言へる。ところで三枝氏自身は、この言葉の意味に徹底しているとは言えない。そして、このことの論証としては、短的に「冒頭文節」について氏が何ら関説していなかったことと十分であると言へるであらう。要するに、『資本論』の背景的論理に気づいていても、その体系的把握の自覚にまで進んでいないのである。その「序説」に「ヘーゲルの端緒の理論」を取り上げていながら、マルクスの「冒頭文節」と比較を試みてさえないことは、これまた不思議なこととして受けとれよう。

武市氏の著書の「序論」第六節「始元の問題」、五の「資本論における始元論」には、流石に「冒頭文節」を、『資本論』の学的体系性の始元として扱ひ、河上博士との解説の差異を指示してある。しかし、学的体系性の内容的構造としての円環的自己運動だけに論点が集中されていて、始元そのものの論理的意味は追求されていない。本稿で氏の労作を媒介にしないのは、かく睨みを異にするからであるが、「冒頭文節」の本質的問題をわたしのごとく限定するところに、氏との間に自ら立場の相違のあることを、わたしが主張しているとも言える。この点も本稿の最後で明らかにするが、河上博士の労作は、わたしのかかる問題限定に於いても、なお問題を共通にしているのである。

まず博士の平明な解説によつて冒頭文節の第一句の意味を念頭に浮べることによしう。長文であるが左の引用は、そのために必要である。

——「資本家的な生産の仕方が支配的に行われている社会では、社会的に生産されているその社会の富は、殆どみな商品である。吾々は社会的に生産せられた富を、その如何なる部分でも、自分の物にしようとすると、言い換えれば、それに向つて実践的な働きかけをなすとき、吾々はいつても、それらのものを商品として見出す。それが吾々の最初に見出すところの、資本家的富の存在の仕方である。私は自分の生活のために、米、味噌、醬油、薪炭、等々を必要とするが、それらは総て他人の生産するところの他人の私有物であるから、私はそれを手に入れようとすると、これらの物が悉く商品であることを直ちに看取する。米、味噌にかぎらず、およそ私の生活に必要なものは、私がこれを手に入れようとすると、私はいつもそれに正札の附いていることを見出す。しからざれば、これらの物の所有者が私に向つて代価を要求するであろう。しかし、それと同時に、苟くもかかる代価をさへ提供するならば、私は私の欲する如何なる物をても、これを商品の世界から得ることができるとであろう。すなわち私は、社会的に生産される富の全体を一個の歴大な商品の集大成として

見出し、個々の商品をかかると社会的富の△細胞▽として見出すのである¹⁾。——
冒頭文節の文意としては右で十分に近い。なほ補うて博士は述べる。

——「社会的な富のかくの如き存在の仕方は、かかる富の社会的な生産の仕方と相俟っている。資本家的な生産の仕方が支配的とならざるかぎりには、商品とならざる労働生産物になお多種多様に存在するのであり、したがって吾々は商品の世界に見出しえざる多くのものを必要とする。私は明治の十年代に山口県の或る城下で育つたものだが、その頃は足袋などは自分の家で造らねばならなかった。……。しかるに資本家的な生産の仕方が支配的に勢力を待てくると、例えば福助足袋、鬼底足袋、等々の商標をもつた資本家的商品として、足袋の如きものまでが商品世界の一員として登録されてくる。……。商品世界の目録は次第々々に完備に近づき、遂いには社会的な富が△一個のおそろしく龐大な商品の集大成▽となる。それを商品の集大成というのは、そこには有らゆる種類の商品が網羅されており、登録漏れのものが殆どないからである。かくて、△金さえあれば何一つ不自由のない▽という世の中になる。ところで、すでに社会的な富が一個の商品集大成に網羅されたらば、その如何なる単位を捉えても皆な商品なのだから、個々の商品は、すなわち細胞の形態で現われるのである。試みにデパートメント・ストアへ行って見よ。……。そこにあるものは玩具でも菓子でも何んでもかても皆な商品であるということは、如何なる子供でも経験的に確めうる事実である。」——
右の解説において注意すべき方法論的意味は、第一に博士が、唯物弁証法の出発点を直接的な経験にのみ求め、そこにおける自明の事実を原理として見るといふことである²⁾。第二は、全体としての資本制的諸社会の富とそれを構成する△細胞▽としての個々の商品とが、最初から内的連絡をもつて同時的に我々に現われていることの指

摘である。第一の方法論的意味は、一つの直接知の立場にとどまっていることを却て告白したただけのものであり、唯物弁証法の立場に到達するための哲学的思索の不徹底のため、要するにその意図にかかわらず博士をして経験主義に墮せしめている。しかし第二の方法論的意味は、なお一層根拠づけられねばならぬ余地があるにしても、博士に哲学的精神のあったことを証示するものとしなければならぬ。これは優れた方法論的洞察であろう。

1、河上博士著『資本論入門』（青木文庫版）、七八頁。および七八―七九頁。

2、同右、八〇頁。

3、同右、七七頁。

4、直接知 unmittelbares Wissen の立場については註7を見よ。

冒頭文節の解明における博士の方法論的立場とその成果とを、評価することが当面の目的ではあるが、そのために順序を追うて、博士の解明に現われているかぎりの全般的な分析方法を博士自身の文章から明瞭にしてゆくことにしよう。

博士は、わたしの叙述してきた冒頭文節の予備的分析における第一段および第二段において、共通して同一の意味にマルクスによって使用されてるはずの「……として現われる」という言葉について、次のごとく述べている。

——「これは吾々に与えられている外的現象であるという意味である。言い換えれば、いろいろ考えてみるとそういうことが始めて分かる、というのではなく、ただ誰もが彼れ自身の経験によって直接に確かめる現象、その現象を何人の眼にも映じるがままに取ってきて、これをこの『資本論』の劈頭に打ち出したのである。だから『経済学批判』には「一見すれば」Auf dem ersten Blickというほどの意味をもった言葉が冒頭において

ある。それは吾々に与えられている現象として、誰もが疑うことのできない、したがって論証する必要のない、最も根本的な経験的事実なのである。」⁴⁾——

——「ところで現われているのは、全体の富が一個のおそろしく老大な諸商品の集大成として現われているのみではなく、同時に個々の商品は、かかる富の構成要素として現われているのである。あるいは細胞となって現われていると言つてよい。……それは、マルクスの眼にのみ斯く映じるのではなく、彼の注意に促されて眼をその方に向けさえすれば誰れでも眼に斯く映じるのである。」⁵⁾——

——「以上の如く吾々に与えられている外的現象、これが、唯物論的見地に立つ吾々にとり、その研究を如何なる点から出発せしむべきかを規定するために役立つ。かくてこの冒頭の一句は「だから吾々の研究は商品の分析をもつて始まる」という言葉で結ばれている。」⁶⁾——

以上で要するに博士は、この文節全体の方法的説明が成就されたと信じているのであるし、事実においても三段の諸命題の論理的関連を明示したことになることも読者は受けとられるであろう。ここにおける博士の方法的立場は、博士自身の言葉どおりに次のごとく要約できる。

——「しかし吾々の注意すべきことは、分析にとつて最初の対象となれる商品の現実性である。それは思惟の産物として出てきたものでなく、研究の前提として思惟以前におかれた一の外的現象である。」——

——「謂わゆる哲学者は研究を始めるために眼を閉じて考え込むが、唯物論者は先ず眼を開いて外的現象を見る。吾々の頭脳内における思惟の産物でなく、考えられる外的現象として自明の事実を、その考察のための前提となす点に、唯物論的認識の根本的特徴が存する。唯物弁証法はかかる事実から出発するがゆえに、それは

他に依存するものでなく、他によって証明されるものでなく、それ自らのうちに自らを証明する。」——

ところで読者は、博士の以上の引用文を「謂わゆる哲学者」のごとく「眼を閉じして考え込む」ことなくして読み過すことが出来るであろうか。哲学者は唯物論者でなくとも凡て「眼を開いて外的現象を見る」。そして見たものについて考えるのである。すなわち外的な所与についてのみ悟性的カテゴリーを適用するということをもって、カントは人間の認識能力の限界であり、したがって有限な人間の一般的な意識構造としたが、哲学者といえども人間であるかぎり、その例外をなすはずはない。マルクスは『資本論』を党派的立場で著述したのであるが、マルクス主義にあつて党派性がセクト主義をいみせず、かえつて客観性を保証する具体的普遍の立場のものであることから、その叙述にあつて、如何なる立場の人にも読めば解り始まるように骨を折つてゐる。ここに既に何から始まるかという始元の哲学的問題が顔を出してゐるのであつて、マルクスもこれを自覚してゐたのである。このことは、この具体的普遍が如何なる特殊性をも包摂するという一面の契機をもつものとして当然のことである。かくて『資本論』は、資本主義社会の経済的構造を研究した経済学として、現にこの資本主義社会に生活している凡ての人々に理解せられるものとしては、われわれの日常の経済生活における誰でも経験する事実、すなわち誰でも共通する体験内容を前提せねばならぬ。そして、この点こそは、河上博士の解説において強調されてゐるところのものであつた。「研究の前提として思惟以前におかれた一〇外的現象」の直接性こそは、博士の始元論の生命である。すなわち「思惟以前におかれた一〇外的現象」である現実的な「商品の現実性」をば、最初の分析の対象とすべき課題としての第一段、第二段のマルクスの文章の解説において、諸商品の集積としての資本制の富の全体も、かかる富の要素的形態としての個々の商品も、同時に、「マルクスの眼にのみ映しるの

ではなく、彼の注意に促されて眼をその方向に向けさせずれば誰れでもの眼にも映じる」と博士は言うのである。「眼に映ずる」とは感性的に直観されるといふことである。感性的直観は外的対象を認識するばあいの人間意識の最も直接的な形態である。しかしながら博士は、「マルクスの注意に促されて眼をその方向に向けさせずれば」、と限定して、資本制的富の全体とそのエレメントとしての個々の商品とが同時に、われわれに直接的であると言つてゐるのである。このことは、後に節を追つて解明的に論述してゆくつもりであるが、一応は不可能なことにせねばならぬ。しかし、とにかく、このようにして博士の主張しているこの直接性は、マルクスを媒介にした直接性であり、マルクス主義に立つ人々のみ承認さるべきだという主張、いわばマルクスにたいする信仰を裏に秘めた発言とせねばならず、逆にいえば、マルクス主義に立たない人々には独断的提言としか受けとりえないものであるとせねばならない。ところで、立場の如何にかかわらず直接的でなければならぬということが、いまここで最初に問題になるべきなのである。したがつて誰にでも直接的に受け容れられること、立場を異にする人々も仮定をおかずして読み始めるものであること、この単純な直接性ということについて、博士にも「謂ゆる哲学者のごとく眼を閉じて考え込む」必要があつたはずであるが、博士はこのことの思弁の必要を自覚していない。この非哲学的な態度は、博士の立場の欠陥であつて、マルクスの立場に立つという前提を許した上でも、以下に述べるような形で再び現れるざるをえない。

5、河上博士著前掲書、六七—六九頁。

6、同右、七六頁、および八〇頁。

7、ヘーゲルは『小論理学』「予備概念」において、客観性にたいして思惟がとる色々な態度を三つに分類して批判の対象としたが、その第三の態度として直接知の立場を挙げている。ヘーゲルは殆どもつぱらヤコービ *J. H. Jacobi* 1743—1819

らを批判しているのであるが、ヤコービによれば「認識とは有限なものの認識、すなわち、制約されたものから制約されたものへと系列をなしてゆく思惟の進行にすぎない。したがって説明とか概念的把握とかは、或るものを他のものによって媒介されたものとして示すことをいみじし、そこでは凡ゆる内容が特殊のであり、依存的であり、有限である。そして無限なもの、真実在、神は、認識がそこから一步も出ないような機械的連関の外にある」Hegel, *Encyclopädie, Vorbegriff* § 62. (邦訳『小論理学』岩波文庫版二二三頁)という。要するに、思惟は真理を把握することができないと説く立場である。これにたいして、ヘーゲルは「媒介された知識は有限な内容を越えることができない以上、真理を把握しえ、また神を直観するヤコービの理性は、直接知あるいは信仰といわねばならぬ」*ibid.* § 63. (二二五頁)。媒介を排除した知的直観のヤコービ的神秘主義にたいしては、いやしくも唯物論者なり科学者なりは、清算ずみのようであるが必ずしもそうとはいえない。ヘーゲルは考察を経験の領域に移して、つぎのごとく叙べている。「たとえば数学者でも、その他、或る學問に通じている人は誰でも、それに達するには非常に複雑な分析が必要であるような解答を、直接に持ちあわせており、また教養ある人は、みな多くの思索と長い人生経験とからのみ生じた沢山の普遍的見地や原則を、直接その知識のうちに持つている。われ／＼があらゆる知識や芸術や技術やにおいて達する熟練とは、このばあいについていえば、まさにこうした知識や活動やを直接に意識のうちに持つこと、否、外的な活動や手足のうちにさえ持つことにほかならない。——これらのすべての場合において知識の直接性は、その媒介を排除しないばかりか、直接知は媒介知の所産であり結果であるという風に、両者は結合されているのである」*ibid.* § 66. (二二二頁)と。

さて、『資本論』冒頭文節の第一、二段の二命題、とくに後者が、感性的知覚の対象になりえたとしたとき、河上博士は、それらの知識は直接的にわれわれの意識に備はれるものとする立場に、不用意におちこんでいるとわたしはいうのである。直接的に自分の意識にあるということは、それを自覚すると否とに差別はない。このばあい「眼を開いて見る」ということは無自覚的なものを自覚さす機縁になるだけである。「マルクスに促されて」というのはマルクスにたいする信仰であらう。かくして経験の領域においても直接知は信仰に通ずる。しかし、河上博士がかゝる直接知の立場を意識的にとる意図のなかつたかぎりでは、経験主義に墮していたというほかないであらう。この経験主義、ヘーゲルが「客観性に

ついでに思想の「第二の態度の一つ」については、後節で触れる。

ところで、博士の信仰されたマルクス自身においてはどうか。第一段、第二段の両命題は、本稿第四節で分析すること、古典経済学の研究において媒介されたマルクス自身のものである。直接的にして同時に媒介的なものである。この直接性とは如何なるものか。マルクス以外の人々には直接的でありえないものか。ありうるとすれば如何にしてか。これが本稿の最後の問題である。

II

しかし、この欠陥を指摘するまえに、博士が経験的な直接性から出発したということ、『資本論』における研究および叙述の始まりが直接的なわれわれ一般市民の体験でなければならぬということを博士が確信していたこと、このことの方法論的意味を十分に評価しておく必要がある。そこで、マルクスが冒頭文節を体系的に位置づけるために『経済学批判』このかた、『資本論』第一巻の「再版」にいたるまで、つねに念頭においていたと推定さるべき、ヘーゲル『大論理学』第一巻の「学は何をその始元となすべきか」の標題をもつ、かの「冒頭論述」を通読してみよう。ここでヘーゲルは、直接的なものと媒介的なものとの非分離的な関係から説きはじめて、つぎに、学問的方法としての始元について論述している。この個所でつぎの諸文章を見いだす。すなわち、

——「……………この現象する精神の学問においては、われわれは経験的感覚的意識から出発するが、この意識こそ本来のいみでの直接的知識である。他の種類の意識、たとえば神的真理または内的経験にたいする信仰、内的天啓にもとづく知識などが、この直接的知識とされることは本来的に不都合であろう。ゆえに『精神現象学』においては、この直接的意識は亦この学問における最初に直接的なものであって、したがって、その前提

である。これに反して『論理学』においては、この『現象学』がその結果として示すところのもの、すなわち純粹知識としての理念が前提となる。『論理学』は純粹学である。換言すれば、純粹知識の展開の全領域である。⁶⁾」——

しかしヘーゲルにあつては、学問それ自身とは、この純粹学としての『論理学』でしかない。かくて、右の文章の直ぐ前に、

——「学問それ自身に入る以前に、認識するということを純粹にし明瞭にしようと求めるのは、結局、学問の範圍外においてこれを説明することを要望するに他ならぬ。しかし、学問の範圍外では、すくなくともそれは学問的方法にもとづいて取りあつかわれることはできない。

自由にならぬばあひ、その始元は論理的である。かくて、この始まりは、純粹知識が意識の最後の絶対的真理であるという事実によつて媒介されている。⁶⁾」——

という文章を見る。これによるとヘーゲルでは、『精神現象学』における始元としての直接的知識、すなわち、われわれの日常の経験的感覚的意識は、非論理的な始元であり、真実の学問的な初まりをなすものでないとされているのである。しかしながら本稿のための序説⁷⁾ないし本稿の前節において、わたしが論述してきたごとく、

『資本論』は「物質の現象学」を一契機としていなければならぬ学的体系性にあつた。そのかぎりで、マルクスでは、「経験的感覚的意識は本来のいみで直接的な知識として」学問的に、したがって「論理的にも始元であり」と考えられていると見なすことができる。とすれば、河上博士の上述の主張は正しいものと承認さるべ

きてあろう。けれども『資本論』は同時にまた「論理学」でもあった。⁸⁾「物質現象学」を媒介にして成立している論理学でもあった。そのかぎりでは『資本論』の学的体系性における論理的始元は、經驗的感覚としての直接的知識だけに決めてしまうことは不可能であらう。あたかもヘーゲルにおいて『精神現象学』に叙述された自然の意識の遍歴過程の最後に到達したような純粹知識の領域における学問的始元の意味のごときものを、マルクスも『資本論』において、その学的体系の始元の他の契機として、考えていたとみななければなるまい。ところで、ヘーゲルにおいては、かの純粹知識としての理念について次のように規定している。——「理念は『精神現象学』の結果において真理にまで發展したところの確實性として規定されるのであって、この確實性は、一面からみれば、もはや対象に対立するものではなく、むしろこの対象を内面化して、これを自己自身にはかならぬものとして自覚しているとともに、他面、その対象に対立して単にその否定となるものとしての自己に関する知識を止揚し、この対象の否定としての主観性をも棄却し、もってこの棄却と一つになったものである。」⁹⁾——すなわち、これはヘーゲルにおいても客観的な概念であったが、マルクスにおいての客観的概念は範疇としての資本であり、この資本の範疇的領域のエレメントが『資本論』において商品とされていることは、周知の事柄である。したがって『資本論』の「論理学」としての学問的始元は、範疇としての商品であるはずである。にもかかわらずエレメントとしての個々の商品は、河上博士の強調にまつまでもなく、われわれの感覺的經驗の直接的な対象である。したがって、『資本論』固有の学的体系性におけるその「論理学」的契機にあって、その始元とされるべきものは、同じく範疇的なエレメントとしての個々の商品であっても、その經驗的感覚という直接性に非ざる、思惟を媒介にして到達しうる超感覺的な、そのかぎりて媒介的なもの、感性的直接性の背後に隠れてい

る内的なものでなければならぬ、あるいは、商品自體の立場にたてば、内的に直接的なものでなければならぬということになる。ヘーゲルも、右に引用したとき「純粹知識の規定からみて、この純粹学としての『論理学』の始元は内的なものに止まらねばならぬ⁹⁾」といっている。ところで、ヘーゲルはこの言葉に続けて、この内在的な始元を把握するためには、「結局そこに現存するところのものを觀察するということが、あるいは、われわれがもつ凡ての反省や臆見を捨てて、この現存するところのものを全く虚心に受容するということが、のほかに必要とすることはない」といっている。感覺的經驗の立場から媒介的にしか把握できない範疇的商品の内的事態を虚必に觀察することは、本稿では遙か後節に果す予定であるが、河上博士のばあいでは、この内的事態における始元については、最後まで問題にならなかった¹⁰⁾。ここに博士の始元の理解における一面性があり、直接知の立場にとどまって經驗主義に墮していたと、さきにわたしが批判した消極的な論拠が、またここにある。

6、ヘーゲル『大論理学』第一卷、七八—七九頁、および七九頁。

7、前号所載の拙稿「資本論の体系性、——冒頭文節の体系的意味を分析するための序説として」。

8、同右の第二ないし第三の両節を参照されたし。

9、『資本論』において範疇とは、すべてヘーゲル『論理学』におけるばあいとは相違して、単に思惟的なものでなく、同時に感覺的でなければならぬことに注意される必要がある。したがって現実的に感性的な資本、貨幣、商品などがそのまま範疇である。だからといって、これらの特殊的個性において超感性的な普遍性を他の契機として内在せしめていることを捕捉しえないときは、これらを唯物論的範疇とは言えない。感覺的にして同時に思惟的であり両契機の矛盾的自己同一にあるごとき範疇の円環的自己運動として、『資本論』の学的体系性が成りたつところに、ヘーゲルの学的体系性よりも徹底して、真実のいみで現実的な学であると、『資本論』について言うことができるのである。本稿第一節の註4を参照。

10、戦前、河上博士が福本和夫氏から批判された博士の立場の限界がここでこのように現れているわけである。両氏の方法論的立場の対立については、拙著『資本論の学問的構造』所収の戦前の拙稿、「認識論としての資本論」を参照。

まことにヘーゲルもいみじくも言ったように、「天上、自然、精神、あるいは他の如何なる場所においても、この直接性と媒介性とを共に包含しないようなものは、一つとして存在しない」¹¹⁾のである。そして同じ個所でヘーゲルはまた言う。この直接性と媒介性とが分離不可能な事柄であるという抽象的な一般的规定も、「思惟、知識、認識と関係してくると、この両契機の対立は、直接的知識または媒介的知識という一層具体的な形態を保つため、認識一般の性質については、『論理学』のうちで考察されると同時に、亦より具体的な形態のうちにあるものとして『精神哲学』および『精神現象学』のうちでも取りあつかわれる。しかしながら学問それ自身に入っている以前に認識を純粹明瞭にしようと求めることは、結局、学問の範囲外において、これを説明することを要求するにはかならぬ」¹²⁾というように、前に引用した句につづくのであるが、『資本論』において取りあつかわれるばあいいにも、具体的な形態によってであるほかないわけである。だからといって、このことは『資本論』の「学的体系性それ自身」からして、すでに「学問それ自身に入っている」のであるから、「学問の範囲外において説明する」という非学問的方法といわるべき性質のものでないこと、前述のとおりである。したがって、直接的なものと媒介的なものとの対立における同一性という関連について、その学問的説明が今ここに問題になり初めたわけであるが、このばあい、『資本論』における冒頭文節の個々の命題が、その具体的な形態のまま、始元の認識論的意味についての学問的な説明になっていると見てよいわけである。そこで、まえに中止しておいたこの冒頭文節の第一段および第二段の両命題についての河上博士の解説の批判に帰ることにしよう。

- 11、ヘーゲル前掲書、七七頁。
12、同右、七八頁。

13、直接的なものと媒介的なものとの矛盾的同一性の論理は、しかしながら『資本論』において、ただ具体的形態でしかありえないというのではない。もし、そうだとすれば、『資本論』はヘーゲル哲学体系における『精神現象学』『精神哲学』『自然哲学』等々と同列になり、純粹学としてのヘーゲル『論理学』の特殊化した形態であるにとどまってしまう。ヘーゲルからマルクスを理解せんとする論者は、かかる見解に立っていると見て差しつかえないであろう。しかし、ヘーゲル『論理学』からの具体化的適用だけでは『資本論』は成立しなかったし、また理解されもしないのである。このかぎり、直接性と媒介性との統一の論理は、『資本論』においても一般的抽象性において存在しており、そして、これはヘーゲル『論理学』におけるそれとたいし異質的な論理構造にあるのみならず、ヘーゲルのそれをも特殊的なものとして止揚したところの一層普遍的なものと考えられねばならない。このことは、具体的普遍の論理構造が、ヘーゲルにおけるとマルクスにおけるとの差異に関連する。本稿前節の第一分節の本文、ならびに別稿「市民社会における市民の人間的自己解放」を参照。

なお、『資本論』における直接性と媒介性との関連の具体的形態の一つに、端的的商品が現代のものか過去のものかの論争をみる。これは右の一般的抽象性にある形態の具体化した表現であり、したがって、この論争の解決も、この一般的な論理構造の把握によってのみ、期待されるべき性質のものとせねばならない。

III

さて、河上博士の解説にたいするわたしの批判は、感性的経験としても、誰にでも共通する客観的な直接性といういみでの純粹な直接性について、博士は徹底的に思弁していかないということであった。商品自体にとっての直接性とわれ／＼にとっての直接性との、内なる直接性と外なる直接性との区別を博士が自覚していなかったことは黙過するも、博士の経験主義そのものにおいての直接性について、その認識論的分析が全く素朴であるとい

うことであつた。そうしたわけて、博士の立場の欠陥は、次のような形で再び現れることになる。

前述のとおり博士は、直接的知識の立場のみからして、「全体の富が一個の老大な諸商品集積である」ということと、「個々の商品がこの全体的富の要素的形態である」ということとが、この二つのことが同時にわれわれの意識に現れるとした。たとえば、「いろいろ考えてみるとそういうことが始めて分かるというのではなく、ただ誰でもが彼れ自身の経験によつて直接的に確かめうる現象」であり、「吾々に与えられている現象として、誰かが疑うことのできない、したがつて論証する必要のない、最も根本的な経験的事実」である¹⁴⁾のであるが、しかしながら、右の二つの事柄は、われわれの意識に同時にではあるにしても同じ性質のものとして現象するとは言えないはずである。なぜならば、「諸商品の老大な集積としての全体的な富」は或る意味では誰れにでも直接的に直観されうるにしても、この全体的な富のエレメントが商品であるという規定は直接的に眼で見られうる事柄ではない。この規定はマルクスが「いろいろ考えてみた」結果に「始めて分かつた」もので、マルクスの思惟を媒介しているとせねばならない。外的現象は感性的直観の対象であるが、マルクスによるかかる抽象的規定は感性的直観の対象ではない。マルクスの立場に立てば、右の規定を直接的に表象しうるとしても、それを理解せんとするときは論証するための思惟をわれわれは働かせねばならない。すなわち「唯れでもが疑うことのできない、論証する必要のない、最も根本的な経験的事実」ではない。これを疑つてみるのが、誰れでもの哲学的意識であつて、最も根本的な直接的経験ということは、ただ前者の事柄にのみ或いは妥当するが後者には妥当しない。後者は直接的にわれわれの意識に現われるとしても、感性的意識に現象するのでなく、悟性的意識に現象するのである。言い換えれば、見られうるのではなくはなくして考えられうるのである。同じく現れると言つ

でも、直観的意識に現れるのでなく思惟する意識に現れるのである。前者は感覺的な、あるいは知覚的な知識として、要するに感性的表象であるにたいして、後者は悟性的知識として超感性的表象であろう。意識への現象としての表象はこのように差別さるべきであり、われわれ人間がすべて、カントの哲学体系において基礎づけられたように、見たものを考へるといふ順序で意識を動かすかぎり、後者は、直接的な感性的表象を媒介にした抽象的規定の表象であることを承認すべきであろう。とすれば、冒頭文節の第一段と第二段とにおける「現われる」という言葉は博士のごとく解説さるべきではなく、第一段は「……と見られる」、第二段は「……と考へられる」という意味に理解せねばならないことになる。そして博士が思惟を媒介にしてのみ表象しうる抽象的規定を直接的に感性的に直観しうるかのごとく安易に決めていることは、認識論としては許されない誤謬¹⁵⁾といはねばならぬ。

14、河上博士『資本論入門』六七頁、および六八頁。本節、第一分節の本文に引用しておいた。

15、本節第一分節註7を参照。

博士がかかる誤謬におちいつていながら何らの不安を感じなかった理由は、博士自身の哲学的意識の不徹底にあるとするほかないが、博士をかかる誤謬に誘った一つの動機は、恐らく『経済学批判』の方における冒頭文節の「一見するところ」という言葉であったであろう。だがこの言葉は独乙語においても内部知覚的な抽象的な表象にたいしても使用さるべきことは、「アイデアを見る、善さを、正しさを見る」ということなどから問題はないはずで、第二段も「一寸見ると個々の商品にかかる富の要素的形態として考えられる」としても文法的にも何ら差しつかえはない。さらに、「一見したところ、……として現れる」という句の二つの意味、あるいは二つの

意識形態の差別に気づかずして、両者を感性的直観に混同することに、博士が落ちつき安んじていられたことの他の一つの動機は、第一段の事柄と第二段の事柄との二つが同時にわれわれの意識に現われるということにたいする博士の方法論的信念¹⁶⁾であったと見なければならぬ。ところで、この信念こそが、後節に論述することく、博士を単純な経験主義に墮せしめなかつたものとして評価すべきものとするならば、第一に、「現われる」という事柄を二つの意識形態に差別する必要がない。しかし、この場合には、思惟を媒介して始めて得られる表象、規定、原理が直接的に直観において知られうるといふ直接知の立場に立つか、あるいはこれは原理、概念、思想がそのまま感性的に経験され、そこから演繹的に誘導されうるとする経験主義の立場に立つかの何れかを捉ばねばならない。第二の場合として、二つの意識形態に差別するのを正しいとするかぎりには、意識の異時的な二つの発展形態としての直観と思惟とが、同時に同一の意識として存在しうることの論証が必要となってくる。しかし、このことが不可能とすれど、感性的直観と悟性的思惟との根源から統一するものとしてのカントの構想力のごときもによって特殊なる直観を新に考え、かつ、かかる直観のわれわれに備われることを論証せねばならぬ¹⁷⁾。博士は第一の場合として、神秘的な直接知の立場にないとするれば、経験主義の立場にあるものとせねばならない。しかし経験論を止揚したはずの唯物弁証法の立場にあるマルクスとしては、第一の場合に該当するはずなく、第二の場合にあるとすれば、彼は特殊なる直観力を如何に考え出していたか、それを自覚的に考えていなかったとしても、それを無自覚的に前提していたのでなかつたか、ということが新たに、われわれに問題として立ちあらわれてくる。このことの解明が長い本稿の目標であるが、わたしはこの問題の解明を、冒頭文節の体系的意味の分析を通じて、徐々に進めてゆくであらう。

16、この博士の信念は正しいにかかわらず、この信念の内省的分析を怠ったため、本文に指摘したごとき、直接知の立場と経験主義の立場との混同におちいり、唯物論を俗流化せざるをえなかった。註17を参照。

17、わたしが実践的直観とよぶものがこれであり、この実践的直観の立場においてのみ冒頭文節の正しい理解が可能であるかぎり、それが階級的立場を秘めていると先に——前節、第二分節で註6を付してある個所で——言ったのである。そして、冒頭文節のこの党派性を論証することが本稿の目的である。

河上博士を誤謬に誘引したと思わゆる『経済学批判』の冒頭文節における「一見したところ」という慣用語は、第一段および第二段の両者に共通し同一化されているところの「……」として現われる」にかかるとは勿論であるが、同時に、第三段——本稿で第四段として残置したところの——の句の中にある「しかしながら」に、対照的にかかっていることに注意せねばならぬ。すなわち、「一寸みると……」として現れる。しかしながら、（事実は……）」という慣用語である。そしてマルクスは直ちに商品の二重性の見地からの分析としての第二パラグラフに入ってしまったのであるが、『資本論』において、その「初版」からして、冒頭文節の始元論としての体系的あるいは方法論的意味を鮮明に浮彫りにした叙述に改めたさい、これらの、第三段の一句と「一見したところ」の語との、二つを同時に省略したのであるが、これは単に同時にという現象だけにとどまらず、かかる慣用語としての本質的関連にも、われわれの注意を誘う。要するに、かかる慣用語による表現が方法論的意味の明示に不相当なることが、叙述の改正の真の理由であったとせねばならない。とすれば、「一見したところ」の語の感性的表象をもって「現れる」という語の意味を規定するものとして、これを重視し、そして、この慣用語のもつ認識論的意味を、単純にたゞ感性的直観としてのみ限定することは不自然であろう。したがって、冒頭文節の方法論的意味を抽出するためには、われわれは『資本論』の方のそれをのみ土台とせねばならないのである。

かくて、第一段と第二段とは、その共通の「現われる」という語を二つの意味にとることも可能となるわけであるが、しかし原文は二段に分けられるとはいえ同一の「現れる」で結ばれた一つの句である。したがって、この同一の一語が二つの差別された意味を同時に持つとすることは、更に不自然であるとしなければならぬ。とすれば、右に分析してきたごとき第一段のそれと第二段のそれとの、認識論的な意識形態についての論理的に可能であり必然的である差別は、如何に処置さるべきであるかの矛盾に、われわれは当面するわけである。この言葉の表現上の矛盾は、さきに掲げておいた構想力を媒介にしたところの、何らかの直観力の新たな論理構造を新らしく思弁的に創造するという問題にかかわることであって、この後者の解決をまづ初めて前者の表現上の矛盾も解決されるとすべきであろう。そこで、この表現上の言葉の問題も、後にその解明をまづことにして暫らくこれを放置し、さきに論理的に分析した「現われる」という語の認識論的意味の差別を承認した上で、論理的分析を一步づつ進めてゆきたい。そのための出発点として、問題は、第一段の命題が

——「資本制的生産様式が支配的に行われる諸社会の富は、一つの老大な諸商品の集積として直観される」——と改めることができ、第二段の命題は

——「個々の商品は、かかる富の要素的形態として思惟される」——と改めうるのであったから、両段階の意識形態の差別を総合的に統一するための準備として、単に外的に第三者の立場から比較することを止めて、両者それぞれの立場自体のうちに入っていく、一つ一つ主体的に考えて見なければならぬ。これが出発点によこたわっている、そして最初に取りあげらるべき問題であって、われ／＼はしたがってこの問題から片づけてゆかねばならない。要するに、外的反省の立場からの差別関係を、主体的に規

定してゆく規定的反省の立場における対立関係にもたらさねばならないのであるが、その前提として、第一段および第二段をそれぞれの立場において、その要請するところの意味を鮮明にし、その論理的意思の必然性のままに考えてゆかねばならぬ。順序として、第一段の命題自体の立場の意味するところのものが何であり、これが更に何を要請しているかを分析したのであるが、その前に、この第一段自体が果して可能であるか否かが吟味されねばならないのである。